

(夏石番矢の夢幻世界 その俳句の集中研究)のために

夏石番矢の俳句を楽しむ

Sayumi KAMAKURA
鎌倉 佐弓

に私は夏石番矢の句をよく登場させている。その中から、いくつかあげてみたい。

階段を突き落とされて虹となる

『獵常記』(一九八三年)

階段も一段、二段では突き落とすとは言わない。また「突き落とす」には、単なる「落とす」にはない、憎しみや嫌悪が感じられるから、ここでの行為は殺人にも相当することがわかる。

なにゆえの殺意か。なぜ憎まれ、このような仕打ちを受けるのか。「虹となる」に、その理由が隠されていそうだ。十字架に架けられたイエス・キリスト。宗教裁判に問われたガリレオ・ガリレイ。第二次世界大戦でのユダヤ人。いや歴史に探らなくとも、われわれの身近にだって、こんな例はいくらもある。人間に妬みや恐怖、猜疑、憎悪、怨恨、保身、欲などがなくなならない限り、いつでもどこでだって起こりうる。

では突き落とされた者は、死んでそれっきりなのか。これも歴史に明らかだが、死後、真実があらわれ、罪や罰を取り消されたり、名誉を取り戻した例など枚挙にいとまがない。

たとえ死んでも、真実はいつか燦然とあらわれるはず。

国際俳句雑誌「吟遊」は夏石番矢が編集代表、私が編集をつとめ、年に4回、日本から出版している。記事の中心はもちろん俳句だが、ほかに俳句も含めた文学全般にわたる評論や書評、あるいは夏石を始め吟遊の同人たちに関連した会合や催しの予告や報告、エッセイなど掲載している。そうしたエッセイの一つに私の連載する「天地の表情」がある。

この「天地の表情」は、たとえば海、空、木といったキーワードを決め、それにふさわしい俳句を五〜六句選んで、それらの句をエッセイでつないでいくというもの。ここ

夏石番矢は、「階段を突き落とされ」た者を虹に変えることとて、彼または彼女の栄光を、白日のもとにさらそうとした。

昔、神々と人間とを結ぶ架け橋だった虹。聖書では、洪水のあと、神とノアとの契約のあかしとしてかかった虹。日本でも虹は神様の通り道とみなされ、あるいは神聖な蛇の姿と考えられて畏怖の対象となっていた。

この世に理不尽なことは限りなくある。虹となることは、そのひとつの、けれど大いなる救済なのだ。

天八固体ナリ山頂ノ蟻ノ全滅

『真空律』（一九八九年）

この句を読むまで、わたしは、天は無色、無臭、透明の気体でできていると信じていた。ときに雨のような液体を持つのは知っていたが、手のひらの感触もあざやかな、たとえば岩のような固体だとは、想像したこともなかった。しかも、この作品は助動詞「なり」で断定すらしている。

いつも見上げる天が固体だとしたらどうなるか。掲出句では、最も天に近い山頂の、蟻の全滅が触れられた。ふだん何気なく眼にする蟻だが、何十、何百、もしかしたら何千匹もの死骸を、いちどきに見る羽目に陥ったら、

ぎよつとするだろう。

アマテラスオオミカミが天の岩戸に隠れたとき、天地は計り知れない闇につつまれてしまったが、それでも蟻の全滅は起きなかった。世界は、アメノウズメノミコトが舞い踊る賑わいとともに、アマテラスの好奇心も手伝って、再び活気を取りもどすのだ。

天が固体のとき、全滅するのは蟻だけではない。人がしゃがんで、ようやくつぶさに見ることの出来る蟻ですら、全滅を免れなかったのだ。何もかもすべて全滅したと考えた方が早い。われわれ人間だつてももちろんつぶれ全滅する側だ。

天はきらめき、安らぎに満ちているだけではない。とくにあらゆる生命の存在を許さないほど、きびしく激しく、恐ろしいものでもあると、この句はカタカナ表記の鋭さをもって告げる。

地の果ての光の網よみどりごよ

『楽浪』（一九九二年）

わたしの好きな画家に、イタリアで活躍したラファエロ（一四八三年～一五二〇年）がいる。この「みどりご」は、そのラファエロが描いた「聖母子」の絵を思わせる。きよろきよろとよく動きそうな眼。やわらかな頬。ふっ

くらしとした手足。いたずら好きなキューピッドをもっと
幼くしたら、こんな姿になるのか。幼いキリストは、聖
マリアの膝から飛び降り、今にも走り出しそうだ。

「地の果ての光の網」が連想させてくれるのも、ヨーロッパで天使の梯子とか、ヤコブの梯子と呼ばれるそれだ。雲の切れ間から幾本も放射状に射しこみ、混じり合う光の筋。

この句では、地の果ての光の網とみどりごとが、助詞「よ」でもって愛情深く呼びかけられた。

どこにあるか誰も知らない地の果て。一生という時間をかけても、たどり着けるかどうかからないそこに、光、それも網になった光の束があり、みどりごがいるという。

番矢はわが子の未来に光を見たかったのだろうか。いつまでも健やかであってほしい。願わくば明るく、美しく、光の網に抱かれていて欲しい。

正直で真摯な祈りが伝わってくる。

「階段を」の句は「虹」の章を書くときに選んだ。また「天八」は「天」の章に、「地の果て」は「光」の章のために選んだ句である。ここまで読んでくれればわかると思うが、私のエッセイは俳句の説明ではない。少しは内容に触れることもあるが、おおむねその句からインスピ

レーションを受けたことを中心に書き綴っている。なぜそういう書き方をするのか。答えは俳句を思い切り楽しく読んでもらいたいからだ。こういう読みだつてできる。俳句つておもしろいんだね、という声が返ってくるならこんなに嬉しいことはない。

「私は水」あらゆる塵を浮かべます

『右目の白夜』(二〇〇六年)

川、滝、海、湖、沼、池、水溜り、田んぼ。あらゆる水に塵が浮いている。きれいに見える清流だつて、塵が留まらないだけで、流れがちよつとでも緩くなればたちまち塵の遊び場だ。木の葉、小枝、藁屑。土や砂も軽ければ即座に浮く。

水面をおおう桜の花びらや、祈りをこめて川に流す灯籠も、美しく和ませてくれるが、いつか時間がたてば壊れて塵と化してしまう。

ここで塵を浮かべる水の側に立つて考えてみる。水は塵をどう思っているのだろうか。塵を浮かべたかったのか。本当は浮かべたくないけれど、あきらめているのか。それとも水は、塵が嫌ではないのか。

掲出句の「私は水」は、この水の側に立ったとき生まれた。ここではもう塵が浮くことの良し悪し、美醜など

問題にされていない。来るものはこばまずという心境だろうか。むしろ積極的に「あらゆる塵」を浮かべて、共に流れ、あるいは漂ってしようとす。そこには何の構えもためらいもない。どんな塵が浮こうが、水としての私はそれに紛れることはないという自信すらほの見える。「私」の心の広さ、厚み、豊かさが存分に伝わってくる「水」。こんな水には、あらゆる塵が喜び勇んで乗ることだろう。

月光を堪え忍ぶ山ここへ来い

『神々のフーガ』（一九九〇年）

きれいだなあ。なんて雄大なんだ。私は生きている。生きていてよかった。山を眺めていると、心がどこまでも広がっていくようで、辛いこと嫌なことなど吹き飛んでしまう。

だがこの「月光を堪え忍ぶ山」はどうだろう。夜中、月光を浴びて黒いシルエットを見せる山が、その高さや存在感ゆえに、あたりを睥睨しているとか、のしかかられそうだと思ったことはあるが、煌煌とふり注ぐ月光を堪え忍ぶ姿だとは、思いもよらなかった。息苦しくさえる夜の山。この山はなぜ月光を堪え忍んでいるのだろう。

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ。

噫、われひと、尋めゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

（『上田敏全訳詩集』一九六二年）

ドイツの詩人、カアル・ブッセの「山のあなた」と題された詩にもあるように、私たちが山に抱く思いはおおむね憧れに近い。大きくて威厳にあふれているかのような山には、つい父や母のような、いやそれ以上の包容力を期待しがちだ。

山の彼方にはきつと良いことがある。すばらしい出会い、素敵な明日がきつと待っている。どんなに山を尋ねて行っても、成功を手にするわけでも、幸福になれるわけでもないと知っているのに、望みを託してしまふ。

そんな私たちを、山はどう見ているのだろうか。勝手なことを言うなと怒っているだろうか。自分で努力してごらんと告げたくてうずうずしているか。いやもしかした

ら、彼は人間の願いを叶えてやれなくて、悲しがっているかもしれない。そんな山だから、月光を堪え忍ぶ。

夏石番矢は、あたかも山に分け入るごとく山の心を思ひ、「いへ来い」とやさしく共感する。

『私は水』は「水」の章で取り上げた句。「月光を」の句は、「月」の章ではなく「山」の章で載せることになった。私が章ごとに俳句を選ぶときに何を基準にして選んでいるのか。基本的には、私の心に深く突き刺さった句を選ぶことにしている。だが、それだけではない。感動した句に、何か私を書きたくなるようなものがあるかどうかというのも大事なことだ。つまり心に深く残っただけでは駄目で、さらに句から訴えかけてくるものがあるかどうかが大切になる。

その句に静かに耳をかたむけ、じっと目を凝らす。そうして、句から語りかけてくるものをそっと受けとめるのだ。

日本海に稲妻の尾が入れられる

『神々のフーガ』（一九九〇年）

稲妻は稲光。雷が音と光の両方の現象を指すのに対し

て、稲妻はどちらかというとき光の方を指す。ピカッ、バリバリ。暗くかげった空から、地上をめがけてジグザグに降ろされる激しい光。触れたものは燃え上がり、あるいは感電し、即死すら待ち受ける。その恐怖。

掲出句で日本海に入れられたのは、ほかならぬ「稲妻の尾」だった。いや、ちょっと待って欲しい。普通、稲妻が降りるとき、地上に触れるのはその先端のはず。番矢はここで稲妻そのものを百八十度、回転させてしまったことになる。そこで何が起きたか。

まず「尾」である。この言葉が連想させるのは、一匹の、または一頭の巨大な生き物。蛇だろうか。龍だろうか。それが尾を海面に、全身をくまなく見せつける。

さらに「日本海」がある。地図を見れば一目瞭然だが、茫漠と広がる太平洋とちがって、日本海は日本列島、樺太、ロシア、中国大陸、朝鮮半島に囲まれている。俯瞰すれば、大きな湖か沼のようではないか。

その日本海に尾を入れ、全身を持ち上げるのが龍や蛇ならぬ稲妻。彼にとつて、もはや日本海は、湖ですらないのかもしれない。あたかも池や水溜り程度にしか思えなくなっているかもしれない。

なんとという壮大なスケールの句だろう。

そして、日本海に尾を入れた、この巨大な生き物である稲妻は、おのが心のおもむくままに激しく唸り、とど

ろき、光り、人間を恐怖と混乱に落とし入れながら、遊びほうけるのだ。まるで一匹のかわいい子犬や子猫のよう。
うに。

朝日夕日も見えざる河口を母と呼ぶ

『狹常記』（一九八三年）

朝日夕日も見えざる河口とは何だろう。どこにあるの
だろう。河口とは海に開いている場所。たとえ北や南に
向いていたとしても、限りなく広がる水平線の何処かに
は、きつとお日様の姿が引つかかるはず。明け方ならば
朝日、夕方ならば夕日。黄色、だいたい、赤などの色彩
に染め上げられてゆく海面。そして空。想像するだけで
うっとりしてしまふ。

だが、この句の河口では「朝日夕日も」見えないという。
つまりあらゆる日が見えないのだ。始終を茫漠とした闇
に包まれているか、薄ぼんやりと灰色に閉ざされた河口。
しかもそれが母だという。

そんな場所ってあるのだろうか。

母をヒントに考えるならば、この河口とは子宮を指す
のではないか。子宮は女性の身体の奥深くにあって、朝
日夕日とも無縁。常に薄暗がりにいるに等しい。

およそ二六六日間、胎児はその不思議な混沌とした中

で、母を感じながらゆっくり成長していく。河口の水が、
海原に出会い、そのまま押し出されるように、世間とい
う大海に出合うその時まで。

「日本海」の句は「海」の章のために選んだ。また「朝
日夕日」の句のキーワードは「母」である。

この「天地の表情」は「吟遊」を出版し始めて間もな
く始まったから、もうかれこれ十五年以上続けているこ
とになる。その間、さまざまな人の俳句を取り上げてき
たが、中でも夏石番矢の俳句は多い方ではないかと思う。

「天地の表情」で私が俳句にエッセイを付け加えるとき、
最も心がけているのは、書きたいことを書いても、基本
的にその俳句から離れないようにすることだ。もちろん
これは私が自分で決めていることであって、最終的には
俳句とエッセイを比べてもらうしかないのだろう。取り
上げた俳句から、どこまで離れられるか、離れてエッセ
イを書けるか。それがこの「天地の表情」を成功させる
鍵だと私は考えている。

それには、さまざまな連想や想像の広がりや許容して
くれる夏石の句がどうしてもあった方がいい。それが彼
の句が多くなった理由である。言い換えれば、それだけ
あらゆる要素を込めて、彼は俳句を作っているのだろう。